中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力（二）

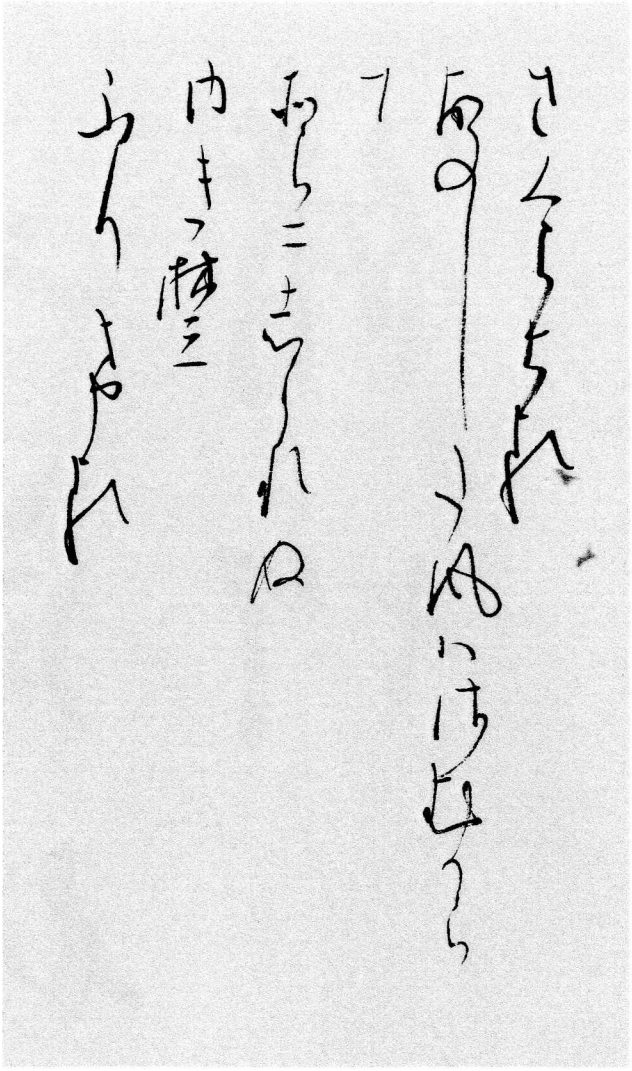
―三十六歌仙―

桜ちるこのした風は寒からで　空にしられぬ雪ぞふりける

紀貫之（きのつらゆき）

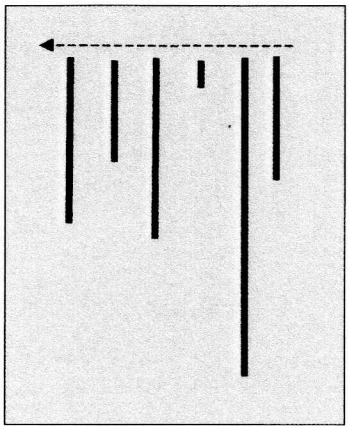
（紀貫之）

?～九四五（天慶8）年。平安時代前期の歌人。貴族。古今和歌集の撰者四人の中の代表的な歌人。伝紀貫之筆として「高野切」、「寸松庵色紙」、「桂本万葉集」や「大井川行幸和歌序」などがあります。



中村素堂先生の書　中谷春径先生所蔵

〈線的構成〉



〈字母〉

さくらち類（る）
故（こ）の し　多風（たかぜ）ハ佐（さ）む可（か）ら
て
所（そ）ら二（に）志（し）られぬ
ゆき楚（ぞ）
ふり希（け）類（る）

〈歌意〉

さくら散る木の下を吹き過ぎる風は、寒くはなくて、空の雪とはかかわらぬさくらの雪が、しきりに降るではないか。この歌は「拾遺和歌集六四番」に出ています。

素堂先生が編纂（へんさん）された「新撰墨場必携・組物類」の中に三十六歌仙が載っています。今回の書式は上の句三行、下の句三行に分けて、頭を揃えた「下り藤（さがかじ）」と称された形式で書かれております。

（中村青藍）